表－7.1.1(2)　重要な植物種の移植方法の検討結果（その1）

種名	確認箇所		生活様式等	繁殖様式		生育環境	移植方法						現況及び移植地の環境状況		移植による撹乱などの影響
	障害灯の改変部	空港施設予定地		胞子又は花粉の移動様式	種子の散布様式		採取・繁殖方法	播種、移植等の実例の有無	使用機材	運搬方法	手法	実験	移植株数	移植地の環境状況及び配慮事項	
ﾐﾔｺｼﾞﾏﾊﾅﾜﾗﾋﾞ(ﾊﾅﾔｽﾘ科)	●	●	草本類・地上性	風媒 水媒	種子なし	やや湿った林床	掘取り	実例無し。	スコップなどによる根掘り。人力作業。	根周りを新聞紙等で包み、土嚢袋等で搬出。	植穴に植え込み水を与え、乾燥及び土壌流亡を防ぐため枯葉等でマルチング なお、株分け及び胞子採取による栽培については株移植を補完する目的で、必要に応じて行うものとする。	実例がないため実験が必要	空港施設予定地であるゴルフ場内のトキワギョリュウ群落(植林)内のやや湿った林内に1株。 航空障害予定地であるﾀｷ山東山頂部のリュウキュウマツ群落(植林)内のやや湿った林内に3株。	本種は疎林内のやや湿地に生育する。 空港施設予定地の株は、近隣の類似環境であるトキワギョリュウ(高木林)群落に移植する。 移植地と同一植生のトキワギョリュウ(高木林)群落の植生調査結果は、草本層(高さ1m)の出現種は14～19種、植被率は10～20%となっており、移植地のトキワギョリュウ群落も同様であると考えられることから、十分な移植スペースを確保できると考える。移植地は現況で生育が確認された植生と同じであり、スペースも確保できることから、生育環境として適していると考える。生態及び繁殖様式を考慮すると、移植後の活着や繁殖については不確実性が高いが、消失による影響を可能な限り低減するため移植を行う。なお、乾燥に弱い種であることから、移植後は慎重な管理が必要である。 航空障害灯予定地については可能な限り改変を避けるものとするが、やむを得ない場合は直近に移植する。移植地は、植生調査を行ったリュウキュウマツ群落の近辺であり、植生調査結果から草本層(高さ0.8m)の出現種は18種とやや多いが、植被率が10%と低いことから、十分な移植スペースを確保できると考える。また、直近に移植することから、土壌条件などは現況とほぼ同一であり、生育環境として適していると考える。なお、乾燥に弱い種であることから、移植後は慎重な管理が必要である。	空港施設予定地の株については、移植数は1株のみであることから、撹乱などの影響はないものと考える。 航空障害灯予定地については、やむを得ない場合は直近に移植する。直近に移植することから撹乱などの影響はないものと考える。
							株分け	実例無し。	掘取り後、はさみ、ナイフ等で株分けし、育苗後に定植。						
							胞子採取(秋～春) 無菌培地への胞子播き	実例無し。	無菌培地内で発芽、受精した育苗を、外界の環境に慣らすために馴化(順化)が必要。						
ﾊﾝｹﾞｼｮｳ(ﾄﾞｸﾀﾞﾐ科)		●	草本類・地上性・多年草	動物媒 風媒	重力散布 動物散布	水田(湿地)	掘取り	容易。実例有り。	スコップなどによる根掘り。人力作業。	周囲の土及び水と共に容器に入れて搬出	植穴に植え込み。 なお、株分け及び種子採取による栽培・移植については株移植を補完する目的で、必要に応じて行うものとする。	実例を参考にする。	空港施設予定地である水田脇の水路内に5株。	本種は水辺や湿地に生育する多年草である。 適切な移植地が事業実施区域周辺の公有地等には存在しないことから、空港施設北側のボックスカルバート下流にビオトープ(池)を創出し、そこへ移植を行う。類似環境を創出することから、生育には適していると考えるが、移植後は池の水位や水質なども含めた慎重な管理が必要である。	ビオトープ(池)内で管理することから撹乱などの影響はないものと考える。
							株分け(根茎の分割)	容易。実例有り。	掘取り後、はさみ、ナイフ等で株分け。						
							種子採種(6～8月以降)	実例無し。	プランター等で育苗後に定植。			実例がないため実験が必要			
ｱｶﾊﾀﾞｸﾞｽ(クスノキ科)	●		木本類(低木～中木)	動物媒 風媒	重力散布 動物散布	山地林内	低木(1m以下)は掘取り(余分な枝や幹は切り落とす)	実例無し。	スコップ、クワ等による根掘り。人力作業。	根鉢を新聞紙、藁等で包み、人力あるいは機械で搬出。	植穴に植え込み水極め(根鉢と現地盤の隙間をなくす)後、乾燥防止にマルチング、根動きや倒木を防ぐため支柱設置。 なお、挿し木及び種子採取による栽培・移植については株移植を補完する目的で、必要に応じて行うものとする。	実例がないため実験が必要	航空障害灯予定地であるカタフタ山山頂部のタブノキーコミノクロツグ群落内に1株。	本種は常緑の高木である。航空障害灯予定地については可能な限り改変を避けるものとするが、やむを得ない場合は直近に移植する。 移植地は、植生調査を行ったタブノキーコミノクロツグ群落の近辺であり、植生調査結果から高木層(高さ10m)の植被率は80%と高いが、亜高木層(高さ7m)～低木層(高さ4m)の植被率は30～60%とやや低く、草本層(高さ0.8m)の出現種は22種と多いが、植被率は5%と低いことから、十分な移植スペースを確保できると考える。また、直近に移植することから、土壌条件などは現況とほぼ同一であり、生育環境として適していると考える。	航空障害灯予定地については、やむを得ない場合は直近に移植する。直近に移植することから撹乱などの影響はないものと考える。
							中木(1～3m)は根回し後掘取り(余分な枝や幹は切り落とす)								
							挿し木		プランター等で育苗後に定植。						
							種子採種(夏～秋)		直播き、またはプランター等で育苗後に定植。						